第十一回戦歿者追悼中央国民集会（平成九年八月十五日）
『日本の息吹』平成９年９月号より

誇りありてこそ

小野田寛郎
小野田自然塾理事長

当時の私たち若者は、国に対してどういう気持ちで戦ってきたのか。昭和十九年に現役兵として陸軍に入隊した私に、ある古参兵が映画館の前で「軍人半額。だから、命も半額なんだよ」と教えてくれました。笑って平気でそう言えた。私たち当時の若者は、「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽し」という軍人勅諭の通り、自分を犠牲にして国家の将来を考えたのです。それがついには特攻隊のあの姿にまでなったのです。

「命は半額でも死んだら神様だ」という思いは例えば空中サーカスで下に網があるというような安心感でした。そうして笑って死んだ英霊たちは現在の日本の現状をいかにみておられるか、と思うと残念でなりません。

私は終戦後三十年近く、作戦任務を貫徹すべく戦い続けました。それが国のためである、死んでも神様に祭っていただける、それだけの栄誉がある、そう思うから働けたのです。死んだら死に損では、誰もそんな任務には耐えられないでしょう。

私は二十三年前、帰還したとき、田中首相以下閣僚や全国の皆さんから思いがけずお見舞い金を頂戴しました。そしてそのお金を全員の方々のお名前を書いた奉書とともに靖國神社に奉納致しました。ところが、これを「軍国主義復活に加担するか」と騒ぎたてた人たちがいました。国がお祭りをしないので、靖國神社の祭典費は奉賛会の方々が支えていると聞いて、いささかなりとも自分の気持ちを表したのに過ぎないのです。それを軍国主義呼ばわりとは！

現下の日本人はなぜ日本を自ら侵略国と決め付けてプライドを捨てて近隣諸国に頭を下げまわっているのか。この姿を英霊は決してお喜びではないと思います。私は時々、堪忍袋の緒が切れて「亡くなった戦友たちに代わって自分が口をきいてやる」と啖呵をきります。それは諸外国に対してプライドも何もない現在の日本の姿に対する鬱憤です。誇りのない人間、誇りのない家、誇りのない国家、それらは決して他人に認められることなく、また己自身も自分を律することのできない人間になると思うのです。誇りがあってこそ人間は、国家は、人に信頼され、国際社会の役に立っていくのではないか。

経済大国と自惚れている今の日本を私は「肥えた豚だ」と酷評します。諸外国からたかればいい、金さえ出させればいい、と思われているのではないか。誠に情けないことです。これからの日本は嘗められた国であってはいけないと思うのです。

我々はいったい何を基準に目覚めればいいのか。それは昭和十六年十二月に陛下のお出しになった開戦の詔書にもう一度よく目を通すことから始まると思います。東亜の安定を願って、明治以来日本は営々と努力してきた。しかしながら「帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ、帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ。事既ニ此ニ至ル」。「豈朕カ志ナラムヤ」。なぜ戦わざるをえないか、はっきりとお示しになられているわけです。また先程、拝聴した終戦の詔書の中にも短いながら示されています。

日本は決して侵略国ではなかった。お互いに東洋の民族が手を携えて、共に栄えようとした、その理想、努力に誇りをもっていいと思うのです。

私は今、夏場のキャンプで子どもたちに「泣くな、負けるな」と教えています。他人に助けを求めるな、自分の弱さに負けるなということです。自立する、自分の足で歩いてこそ、初めて世界に通用する日本になると思います。